

暑い暑い夏が来ているという感じの7月でした。劇的な雨の夕涼み会、そして、真夏そのままの海水浴。どれほど汗をかいたことかわかりませんが、不思議と大地の木陰や室内は涼しい限りです。心配したカビも今年は、最小限ですみ、それだけ、暑い日が続いたということでしょうか。でも、全般的に野菜や果樹の生育は遅いということですが、手をかけたジャガイモは、今年は大きそうです。そのくせ、雑草の生育はエネルギーで早く、かなり奮闘した季節でもありました。

1学期も終了です。美しく、丁寧に、真心込めて、シンプルに行おうという今年目標に対して、皆様の評価はいかがですか。そして、お話や絵本やわらべうた・食・そして自然活動(創・想・動)という新しい軸をもとに、新たに大地はスタートして、スタッフはいろいろ勉強したり、給食に心を向けてきました。そんな結果も出るのも、長い目で暖かく見守って頂くことが基本となります。2学期も、更に学び、目標をめざして精進したいと思います。良い夏休みをお過ごし下さい。



【うさぎ事件】

毎週水曜日の夕方、妻と一緒にヨガを学んでいます。2人とも最高の劣等生で、周囲のしなやかな人たちと比べ、あまりの身体の硬さの情けなさで苦笑している毎回です。それでも、少しずつ柔らかくなっていくような気がしています。

先週、9時過ぎに帰ってくると、厨房の電気がついていました。おかしいなと思って2階へあがってみると、末っ子が一足先に夜の野球の練習から帰って来ており、チャロ(ウサギの赤ちゃん)がいないとしょんぼりしている。

「明るいうちに入れておいてくれなかったからだ」と文句を言っている。暗い中、野球から帰って来て、そのまま2羽のウサギを庭の巣箱から2階へあげるのだが、チャロはまだなつかないの、捕まえるのに一苦勞。そのため、まず、ティロを横のドアから出して、2階へ連れてきて、再び巣箱へ行ったら、チャロがいなくなっただけ。どうやら鍵を閉め忘れたらしいが、本人はそれを素直に認めず、「ちゃんと閉めた」と言い張り、「入れておいてくれなかったからだ」と言って落ち込んでいる。

末っ子のウサギへの愛情はすごいもので、本人は、ウサギを幼稚園に出すのは、以前から実はあまり気が進まないのである。新聞配達途中でも寒い日でも、必ず餌をとり、学校から帰ると、そして、朝起きると、必ず、交代で時間を決めて、2羽をリビングに離して遊んでいる。それだけに、今回の状況はかなりのショックであった。

この時、妻を含め(妻には珍しく)、私たち夫婦は痛恨のエラーをしてしまった。人のせいにして文句を言っている末っ子の気持ちをまともなうけて、「おまえが悪いでしょう」「人のせいにしてはいけません」と言ってしまった。末っ子は、野球の練習で空腹にもかかわらず、夕ご飯を食べずそのまま悲しみのまま眠ってしまった。

私は、暗い中、ヘッドランプで30分ほど見つけたが、発見できなかった。諦めて、2階へ戻ると、妻が痛恨のエラーの説明をした。「私たちは、いつも、人のせいにするのを家庭でしているような気がする」(どきっ、確かに私のことだ、素直に過ちを認めない)。愛するウサギがいなくなった悲しみ、切なさは人一倍で、この状況(私たちが帰ってくるまでの一人の間、さぞ不安と悲しみのことだったろう)の中、心を整理するために、人のせいにならなければどうしようもなかったのだから。本人は鍵を付け忘れた事など承知しているのだが、それを素直に受け入れられない心情だったのだから。そこへ、「おまえが悪いんだらう」の言葉は厳しかった。まず、その悲しみに寄り添うべきだった。妻は、ベッドに入っている末っ子にむかって、「明るいうちにお母さんが入れておけば良かった、その通り、ごめんね」と謝っていた。そして、痛恨のエラーをしてしまったと嘆き悲しんでいた。

私は「お父さんが明日早く起きて、必ず探してやる」と声をかけ、土砂降りの雨音を聞きながら眠った。雨だったら、狐やネコの襲来は受けないだろうと予想した。翌朝、妻は東京へ出掛け、その際、末っ子をよろしくと不安な顔で出掛けた。私は、母親のティロをまず巣箱へ入れ、母親を求めてくる作戦をまずとった。朝の静けさの中、耳を澄ますこと30分、どこにも動いている気配がない。かなり発見する自信が下がってきた。次に、周囲の草刈り作戦。ビーバーで刈り取れば、どこからかびっくりして飛び出してくるかもしれない。約1時間刈り終えたが出てこない。もうほとんど諦めた。そこへ、新聞配りに出掛けようと末っ子が玄関から出てきて、やはり、同じように周囲をしばらく探している。声をどうかけてよいやると、機械を背負い、大地の玄関前で末っ子に声をかけようとした途端、階段の下から石釜のほうへ、チャロが飛び出してきた。2人で歓声を上げ、大捕物が始まった。ほぼまだ野生に近いチャロだけに、どうにもならない。しかし、運良く、ホールのベランダから、工作室へ飛び込み、あわてて、ドアを閉めて、中で捕まえることができた。こうして、チャロは無事、末っ子のもとへ帰ってきた。

この事件を、テニスの次男は、翌晩に知った。そして、この夜、再び、痛烈なパンチを、私たちは、次男から浴びた。実は、約1ヶ月前位に、チャロがリビングで行方不明になった。どこを探してもいない、「誰かがドアを開けっ放しにしていたからだ」「こんな時に出すからだ」「ちゃんと見ていなかったからだ」などと、家族で楽しんでたのに、事件が起こった途端、誰かのせいにしてたり、雰囲気的に末っ子のせいになっていた感じであった。その時は、娘が偶然、本棚の本の裏側という信じられない場所にいるのを発見して、事なきを得た。そんな事件であった。

そして、次男は、外でのチャロ発見と親の痛恨のエラーの話聞いて、不機嫌にそして怒ったように、こう、捨てぜりふを吐いて、部屋へ戻った。「あの時(室内での行方不明事件)は、全然ゆうなは悪くなかった。皆して、ゆうなが悪いようにして、あれはおかしい」と。以前は次男と末っ子は格段と仲が良かったが、今は思春期であり、ほとんど話もしないが、次男も長男同様、末っ子を心では尊敬し、可愛く、大切にしている。それだけに、人のせいにする親の姿を強烈に批判した言葉であった。

この2つの連続したパンチは、親としてかなりきいた。子どもは見ているなあ、普段かっこいい事言っている、こんな時にしっかり見ているんだなあ、と、そして、こんなわずかな隙について、親への不信を高めていくのだから。そして、親の器を見ていくのだから。あまりの普段からの器の狭さを感じた事件であった。

この事件以来、ウサギを更に家族で大切にするようになった。それは、2度と逃げないようにすることではなく、ウサギが大切なことを教えてくれた恩人だからである。末っ子は、もう下へは移さないとせず、同じように、下へ毎朝連れて行く。しかし、暗くなる前に2階へあげるのは、親の役割となった。